

キャリアパス拡大フォーラム (PART 1)

日 時：2007年12月16日 (日)

テーマ：『博士がつくる 21 世紀社会～科学技術人材配置の夜明け～』

<開会挨拶>

堀尾 尚志 氏 (神戸大学理事・副学長)

皆様おはようございます。きょうのフォーラムの開会にあたりまして、神戸大学を代表いたしましてご挨拶を申し上げます。

いつもはこのような決まり文句で最初の挨拶を始めるのだと思いますけれども、伺っておりますと、きょうのフォーラムはそのようなフォーマルな紋切り型の挨拶で始まるフォーラムでは決していないので、最後はバトルが起こるかもしれないと聞いております。したがって紋切り型の挨拶はやめることにいたしまして、思いますと、私は今から三十何年前、ドクターコースを終わりました職のアテもなく浪人しておりました。出口なしというような気分で日々を過ごしておりましたのを覚えております。

私は専門が農業機械でございます。ですから中身は機械工学で、学位論文は機械の計算値制御を、アルゴリズムを扱っていました。機械工学でございますので、それ以来ずっといろいろな会社、あるいはいろいろな農業生産の現場、そういったところとおつきあいをいたしました。仕事も相当にいたしましたし、夜は酒を飲んで、若うございましたから、農協とか、あるいは会社と議論をしたことを覚えております。

そのときのことを思い出して、思うことは何かというと、これはすぐ後で申し上げますが、先ほど写っておりました「博士がつくる 21 世紀」、確かに今の日本の科学技術と改革、それから近未来、未来を見通した状況を考えますと、もっとドクターホルダークラスの研究者を社会は必要としている。これは間違いございません。しかし一方で、博士号、ドクターホルダーは要らないとはじめから決めつけてかかるような考え方、あるいは感覚でいらっしゃる経営者も決して少なくありません。これをやはりこうした場を何回も積み重ねて明らかにしていく必要があるかと思えます。それは企業のそうした人たちに対してもそうありますが、一方われわれの側についてみれば、大学という社会を出たことがない大学の人間、あるいは出たことがあっても世間の人と1対1で常に話をする機会を持っていない人たちは、ともすれば、世間が何を考えているのかなかなか分からない、まずそのあたりの文化の違いと申しませうか、そういったところも含めた徹底した分析が要るのではないかと思います。

私は今、大学の運営に携わっております。その以前は部長として務めてまいりました。そのときにつくづく思いましたことはこういうことなのでございますが、どうも大学にずっといる人間というのは自分の論理が通れば必ず物事は実現すると信じてやまない。世の中はそんなものじゃない。それだけでは世の中は回っていかない。どこかで妥協点を見つ

けて、きょう明日、いったい何をするのかベターか、ここところが、どうしてわからないのだろうと常々思ってまいりました。

しかし、そうした見方をするときには思いますことは、機械工学をやってきた人間と、純粹の物理の人間、これはやはりそれぞれ受け止め方が違うところがございます。あるいは意識の構造自体も違うかもしれません。そのように考えてまいりますと、これは単にシステムをどうするか、センターの活動をどうするか、それだけではなくて文化の問題、あるいは意識の問題、意識の構造の問題であります。そういったところの観点からの分析作業が要るようにも思うのです。

さて、最初に申しましたように、先ほど伺いましたことですが、この会は途中からバトルになるかもしれない。そうなればこの会の目的は半分達せられるのだというようなことでした。バトルをしていただいて、第 1 回の成果につなげていただきたいものと期待しております。